

## 「そして父になる」

★★★★★

2013(平成25)年7月30日鑑賞

&lt;GAGA試写室&gt;

監督・脚本：是枝裕和

野々宮良多（建設会社のエリートサラリーマン）／福山雅治

野々宮みどり（良多の妻）／尾野真千子

斎木ゆかり（雄大の妻）／眞木よう子

斎木雄大（ゆかりの夫）／リリー・フランキー

野々宮慶多（良多の息子）／二宮慶多

斎木琉晴（雄大の息子）／黄升炫

宮崎祥子（看護師）／中村ゆり

野々宮大輔（良多の兄）／高橋和也

鈴木悟（良多の友人の弁護士）／田中哲司

山辺真一（良多の会社の同僚）／井浦新

野々宮のぶ子（良多の義母）／風吹ジュン

上山一至（良多の会社の上司）／國村隼

石間里子（みどりの母）／樹木希林

野々宮良輔（良多の父）／夏八木勲

2013年・日本映画・120分

配給／ギャガ

## &lt;そんなバカな！6年間育てた息子が・・・&gt;

第6回カンヌ国際映画祭コンペティション部門で審査員賞を受賞した本作は、数年前に自分自身も父親になった是枝裕和監督が、「自分と子供を繋ぐものは何なのか」を考える中で生まれた企画。福山雅治を主人公に起用することを前提としたうえで、「父親になる」物語にすることが企画で決まり、是枝監督が自分で脚本を書き始めたが、そこで参考にしたのが奥野修司の『ねじれた絆－赤ちゃん取り違え事件の十七年』（文春文庫刊）だったそうだ。

アンジェリーナ・ジョリーが熱演しながら、惜しくも第81回アカデミー賞主演女優賞を逃した『チェンジリング』（08年）は、1928年のロサンゼルスを舞台にした9歳の一人息子の「失踪」「発見」「別人」という壮大な物語だった（『シネマーム22』51頁参照）が、本作冒頭に展開していくストーリーを見れば、本作は病院の単純なミスによる子供の取り違えらしい。しかし、いくら田舎の病院でも、そんなことはあるまじきこと。病院からの連絡を受けて出向いた席で、はじめてそんな説明を聞かされた野々宮良多（福山雅治）・みどり（尾野真千子）夫妻は、「そんなバカな！6年間、愛情を注いで育ててきた一人息子、慶多（二宮慶多）が他人の子供だったなんて！」と憤慨したのは当然だ。もっとも、弁護士を同席させた病院側の説明によれば、取り違えられたもう一方の夫婦である斎木雄大（リリー・フランキー）・ゆかり（眞木よう子）夫妻の一人息子、斎木琉晴（黄升炫）と共に正式のDNA鑑定を実施することが不可欠らしい。なるほど、そう言わればそのとおりだが、もしDNA鑑定の結果、そんなあり得べからざる事実が動かすことのできない事実になれば・・・。

## &lt;血を優先？それとも、時間を優先？&gt;

プレスシートによると、是枝監督が父親になり、自分と子供を繋ぐものは何なのかを考えるようになると、「血か」「時間か」という昔からあるテーマと向き合おざるをえなくなつたらしい。興味深いのは、そこでは是枝監督が参考にした『ねじれた絆－赤ちゃん取り違え事件の十七年』ではほとんどのケースが、また、本作に見る病院側の説明では、100%が「血」を選び、お互いの子供を「交換」しているということだ。もっとも、『ねじれた絆－赤ちゃん取り違え事件の十七年』に書かれた実際に起きた出来事は、「お互いの子供を交換しないという着地をしています。この特殊なケースをそのまま置き換えることは難しいですが、映画の中でも、もし『血』に閉じない着地点を提示できるのなら今やる意味があるなと考えました」とのことだが、さて本作は・・・？

野々宮夫妻と斎木夫妻の両者に対する病院側の説明では、子供を交換するのなら早ければ早いほどよく、2人の子供が小学校に入る4月までには決めた方がいいそうだが、そこで、とっさに雄大の口から出たセリフが「犬や猫じゃあるまいし」というもの。たしかにそうだが、それを聞きとっさに「犬や猫でも、それはいかないわよ」と切り返した雄大の妻ゆかりのセリフがすばらしい・・・？もっとも、両夫妻ともそんな冗談が言える気分ではないのは当然で、本作中盤のストーリーは「血＝生みの親を優先？それとも「時間」＝6年間の育ての親を優先？の選択に、両夫妻が苦悩する姿がメインとなっていく。

## &lt;「血」派は？「時間」派は？&gt;

ちなみに、「血」派すなわち血を優先すべきという説に立つのは、良多の父親・野々宮良輔（夏八木勲）。かつては株で大儲けしたこの父親も今はすっかり落ちぶれ、古いアパートで再婚した妻・野々宮のぶ子（風吹ジュン）と2人で暮らしていたが、父親が病気で倒れたと聞いた良多が、兄の野々宮大輔（高橋和也）と共にそのアパートを訪れてみると・・・。良多は何かとこの身勝手な父親を敬遠してきただけに、その父親から「大事なのは血だ」と言われても、言い返せないのはいかにもつらい。他方、この父親と再婚した妻は「時間」派で、この育ての母から「血なんて繋がっていなくたって情は湧く。私はそのつもりであなたたちを育てた」と慰められると、良多はこれにも何も言い返すことができなかったから、更につらいことに。

良多の目から見ると、両家族だけで子供を連れて会うことになったショッピングモールのカフェで、飲食代金の領収書を貰って病院に請求しようとしたり、当然のように「誠意はお金だ。病院は慰謝料をいくら払ってくれるのだろうか？」と口に出す雄大は不愉快だった。しかし、少しずつこの夫妻との交流が深まってくると、親子の情は自分も彼らも同じであることが少しずつ明らかに。したがって、血を優先？それとも時間を優先？の決断を下すのが斎木夫妻も難しかったのは当然だが、さて、その選択は？

## &lt;両夫妻の対照性に注目！野々宮夫妻は？斎木夫妻は？&gt;

良多は一流大学を卒業して大手建設会社に勤めており、乗っている車はトヨタの最高級車レクサス。しかも、住んでいるのは都心の超高層マンションで、広さは少なくとも80m<sup>2</sup>はありそうだ。これが買取りが賃借りかはわからないが、今の時代だから社宅でないことは明らかだ。しかし私の見るところ良多の年齢は35、6歳だから、20数年前のバブルの時代ならともかく、今の時代にこの設定は少し違和感がある。良多は上司の上山一至（國村隼）からもその能力を認められており、大きなプロジェクトの責任者を任せられているから、日曜日返上の仕事も当然。弁護士として日曜日返上の生活を40年間続けてきた私と同じように、それを当たり前と考えている今どき珍しい男だ。野々宮夫妻は今一人息子・慶多の一流幼稚園への入園のために奔走していたが、そこでも良多のキーワードは努力＝頑張り。ところが、そんな良多の「信念」から見ると、我が息子・慶多は人柄は良さうだが、頑張りの面では少し物足りないらしい。ピアノの練習も一生懸命やっているようだが、その進歩は・・・？

他方、子供の取り違えが判明した後、はじめて野々宮夫妻の前に登場する「電器屋風情」の斎木夫妻は、長男・琉晴に続いて弟と妹を産んでいる、賑やかというより良多に言わせると、がさつな夫妻。そのことは、ショッピングモールのカフェで見せた領収書「事件」や、すぐに慰謝料のことを口にした態度からも明らかだが・・・。

## &lt;子育て方針も両極端！&gt;

そんな両極端な夫妻だから、子育て方針も両極端なのは当然だ。野々宮夫妻の方はどうちらかと言うと妻のみどりが良多のリードに従っていたが、斎木夫妻の方は明らかに妻ゆかりがリードする家族。ゆかりを演ずる眞木よう子は、『さよなら渓谷』（13年）での熱演を代表としてエキセントリックな役柄が似合う女優だが、本作では3人の子供、いや亭主を含めて「4人」の子供を抱えた肝っ玉母さんの雰囲気をうまく出している。

良多はそんな風に新しく自分の息子となつた血の繋がつた琉晴に一生懸命に接していたが、その分、妻のみどりに対する配慮が欠けていることは観客の目から見ると明らかだ。しかし、当の本人はそれに気がついていないらしい。みどりは子供の取り違え事件が発生した当初から、「なぜ、母親の自分が気づかなかつたのだろうか」と自分を責めていたうえ、夫の良多が腹の中ではきっと「母親なんだからそれくらい気がつけよ」と思っているだろうことが、大きな心の重荷になっていた。もっとも、それについては「産後の出血がひどく、自分の意識が朦朧としていたこともあって・・・」。そんな言い訳が一応成立していたが、どうしてもみどりが許せなかつたのは、取り違え判明直後に良多がつぶやいた「やっぱりそうだったのか」という言葉。そりや一体ナニ？「やっぱり・・・」とはどういう意味？それをみどりから指摘されると、良多は答えに窮してしまうわけだ。

良多はそんな風に新しく自分の息子となつた血の繋がつた琉晴に一生懸命に接していたが、その分、妻のみどりに対する配慮が欠けていることは観客の目から見ると明らかだ。しかし、当の本人はそれに気がついていないらしい。みどりは子供の取り違え事件が発生した当初から、「なぜ、母親の自分が気づかなかつたのだろうか」と自分を責めていたうえ、夫の良多が腹の中ではきっと「母親なんだからそれくらい気がつけよ」と思っているだろうことが、大きな心の重荷になっていた。もっとも、それについては「産後の出血がひどく、自分の意識が朦朧としていたこともあって・・・」。そんな言い訳が一応成立していたが、どうしてもみどりが許せなかつたのは、取り違え判明直後に良多がつぶやいた「やっぱりそうだったのか」という言葉。そりや一体ナニ？「やっぱり・・・」とはどういう意味？それをみどりから指摘されると、良多は答えに窮してしまうわけだ。

## &lt;そして、父親に・・・？&gt;

一方ではそんな風に夫婦の危機が迫る中、良多は琉晴に対してお箸の持ち方から、ピアノのお稽古その他諸々について自分の教育方針を叩き込もうと涙ぐましい努力を続けていたが、これは斎木家で自由にのびのび育ってきた琉晴にとっては苦痛以外の何物でもなかつたのは当然。その結果、ある日、琉晴の家出事件が発生したから大変！みどりも良多も青くなつて琉晴の行方を捜したが、結局何のことはない、琉晴はもとの両親、斎木夫妻の家に一人で戻つていたわけだ。

そんな現実を目の前に、それまで持つていた良多の自信は完全に崩壊！俺はどうすれば父親になれるんだ？俺より電気屋風情の方が父親としてふさわしいのか？良多の気持は日々に乱れたが、さてここから良多はどのようにして父親になっていくの？本作がここから見せていくラストに向けての展開は、あなた自身の目でしっかりと。

20

13(平成25)年8月1日記